

参院選結果いかに見るのか

自民党政権に断を!

腐敗・自滅の道を進む自民党

リクルート・消費税・宇野首相の女性問題をめぐる状況のなかで行われた東京都議選において自民党は大敗北し、社会党は三倍増の躍進を遂げた。この参議院の前哨戦として争われた都議選における自・社の相関関係は、そのままそっくり三週間後の参院選へと受け継がれていった。

しかも参院選を前に自民党から失言・暴言が続出した。「女性が政治の世界で使われるものになるだろうか」(堀之内農水相)。「坂野自治相は3%の消費税について「四%だったら端数が少なく負担感が違ったかもしれない。」(松田代議士(長崎二区))が「農民は筋肉労働で働くしか能がない。」結果は「やる」前から分かっていた。各マスコミ機関は参院選前にすでに自民党の大惨敗、社会党の大躍進を「予測」し、結果は「予測」通りに終わった。

女性差別に対する怒り爆発

この参院選を見る時、女性の台所からの決起は決定的だったと言ったことが出来るであろう。生活苦(消費税導入の伴うもの)、女性差別に対して女性は「NO」の意思表示をしたのである。

農民支持層の自民党離れ

選挙のいまひとつの特徴は、自民党支持の屋台骨をなしてきた農民支持層の自民党離れ現象である。自民党は戦後一貫して農村部を支配下におき、各級選挙を優位に闘ってきた。自民党がこれまでに伸びてきたのも大量の農民支持票があったからに他ならないのだ。この農民に対して、日米経済摩擦の「つけ」を「農産物の自由化」(日本農業の切り捨て)という形で対応したのだから、農民の反乱は必至だったわけである。九〇年代を前に

して自民党は支持層獲得政策を、今までの農民層から都市労働者層に一八〇。転換させようと狙ったのだった。ある意味では、自民党は農民の自民党離れはある程度しかたがなると決めこんでいたのだった。ところが、ここまで自民党離れが激進するとは計算していなかったのである。

社会党の躍進

いずれにしても自民党は歴史的大敗北を喫し、社会党は大躍進したのは事実である。だがこの結果をそのまま手放しで喜ぶわけにはいかない。なぜならば、社会党が本来の革新の灯としてこの社会党としての役割を果たし得なくなっているからである。非武装・中立論の放棄、安保・自衛隊・原発容認と次からつぎへと労働者階級の期待を裏切つて、革新性の面影が薄れてきている。今回の選挙は自民党に対するNOの審判が下つたにすぎず、社会党に対

するYESの審判が下つたと判断することは早計である。

社会党は今回の選挙結果の深層心理を冷静に判断し、労働者階級の要求が何であり、何を願っているのかを知るべきである。そうすれば、非武装・中立放棄、自衛隊・原発容認などという「答は帰ってこないはずである。

連合は革新ではない

選挙の特徴についてあと二つばかり見解を明らかにしておこう。ひとつは「連合」問題である。「連合」とは言うまでもなく右翼労働「統一」戦闘的労働運動破壊を目的とする帝国主義支持の団体であり、到底野党とか革新と呼べるシロモノではない。将来自民党の受け皿となる可能性が強い性格をもっている。

自民党支持の鉄道労連革マル

もうひとつの特徴点は、鉄道労連革マルが自民党に全面協力したということである。労働組合を潜称する組織として日本で初めて鉄道労連が自民党を支持したのである。「労働組合が自民党を支持する」ことはタブーであった。しかし鉄道労連革マルはこのタブーを「ブチ破つて」堂々と自民党と連合を組んだのである。ここまで自民党と一体化した鉄道労連革マルに未来はない。

国鉄・安民選決戦必勝

始まった自民党政治の崩壊に対して今こそ追撃戦の闘いに起とうではないか。秋にも予想される衆院選を清算事業団闘争の政治焦点化、社会焦点化と固くリンクさせて必勝をかちとろう。

参院選への御協力ありかとうござりました。